

松村通信第34号

2001年5月6日
松村勝弘

私が「この国」を好きな理由

この連休は、7月の私の学会報告の準備で明け暮れ、休めませんでした。おまけに連休前日に出かけた別の学会と評議員会では、10月の学会報告を依頼されましたので、この夏休みも再び学会準備で休めそうにありません。けれども依頼されるのは決して悪いことではありません。結局は自分の勉強になるのですから。そういった学会準備の合間に、尾野村祐治『ゼネコン大破壊』東洋経済新報社、2001年3月刊、と、竹内宏『長銀はなぜ敗れたか』PHP研究所、2001年5月刊、を読みました。特に後者は長銀マンの無念さを感じる時、つらく且つ怒りさえ覚えるものでした。いずれまた紹介したいと思います。

ところで、先日東京へ日帰り出張しました。こういう新幹線車中は最近の私にとって絶好の書齋となっています。往きの新幹線で用意していた本を読んでしまったので、たまたま東京で見つけて読んだ本が結構面白かったので紹介します。日下公人『私が「この国」を好きな理由』PHP研究所、2001年4月刊、がそれです。元気喪失状況の今のわれわれ日本人に自信を取り戻させてくれる内容となっていて、元気回復剤として一読を勧めたいと思います。

長寿国 冒頭つぎのような「まえがき」から始まります。「日本には世界に自慢できることがたくさんある。ノ日本国首相がサミットに出席したときは、次のように発言するとよい。ノ“世界人類共通の願いは長寿だから、それを実現した国が一番よい国である。一番は日本で平均寿命は男女平均で八十何歳。アメリカはその次で、七十何歳、ヨーロッパ諸国は約七十歳で、ロシアは五十何歳である。それからアジア諸国は約五十歳だから、国づくりにおける日本の成功はハッキリしている。これからサミットでは、この順番に座ることにしよう。そして、世界各国の政府が日本国首相の発言に学ぶようにしたら、諸国民の幸せと世界の繁栄は容易に実現するものと信ずる”ノこういえば、世界の新聞は否定し難い日本の力強い発言として、大きく報道するにちがいない。ノもしも報道しないようなことがあれば、この発言を補強する説明はいくらでもできる。ノ長寿の次には豊かさを挙

げることができる。ノ“世界一たくさんのカネを世界各国に融資したり、投資したり、援助したりしている国は、日本である”ノと、そういつてあたりを見回せば頭を上げる国はないはずである。」さらに続けて「“犯罪が少ない国に住みたいのも、世界人類共通の願いである。刑務所の厄介になっている人の数を数えると、アメリカは五百八十九万人で、日本はたった十一万人である。五百八十九万人は、大阪市と名古屋市と北九州市の人口にほぼ匹敵するが、それだけの犯罪人の世話に一人当たり年間二百五十万円ずつを要する国の政府は恥ずかしいと思うべきである”とデータを出すこともできる。」こういう話から始まります。

善意 著者はさらに痛烈です。

中国には合計六千億円前後の援助をしているのに、中国の企業は法律を守らず、日本の企業に対しては、アメリカ企業よりも無礼を働く。あるいはロシアはクラスノヤルスク合意(1997年11月)において、2000年までに平和条約を締結しようとしたにもかかわらず、ついにしなかった。それでも日本はロシアが提案を受け入れやすいように、サハリンやシベリアが寒冷で困っていると聞けばディーゼルエンジンを送り、さらに赤ん坊が火傷したら札幌の病院で手術をし、さまざまな援助や善意を示してきたのに何の効果もなかった。それどころか、つけ込んでくるばかりである。あの国の常識はこの国とは別で、軍事力がない国は常に献上品を出すのが当然であるらしい。ノアメリカも自由貿易を堅持するという立場ゆえ、日本は一生懸命自由貿易を行ってきたにもかかわらず、突然これからは相互主義だという。アメリカ通商代表部(USTR)が出てきて、「日本はアン・フェアだとさんざん文句を言う。以前、USTRのカーラ・ヒルズ代表は「日本ではこんなミルク瓶をつくっている」と、テレビカメラの前で大見得を切ったことがあったが、しかし「日本ではこんな製品は見たことがない」という意見が出たために、調べてみたらフランスが使っている瓶だった。ノこのようなことがあって、「アメリカのいうことをそのままハイハイと聞いていたら、日本はどこへもっていけるかわからない」と日本人が思いはじめた。

このようにいわれています。新しい内閣で田中真紀子外務大臣は日本人の思いを発信してくれるのでしょうか。

外圧 外圧について、国際会議におけるフランスの発言が紹介されています。2000年のある会議で、「国際社会では が行われているのに、フランスは行っていない」といわれたとき、フランスの外相は「フランスが行っていない以上、国際社会で行っているとはいえない」と反論したということが紹介されています。そして、フランスの人口と経済力は日本の約半分なのだから、日本もこういえる資格がある。“日本が行っていない以上、国際社会が行っているとはいえない”と。確かに、日本政府は外圧に弱いことは間違いない。フランスのように言ってみてはどうかという日下氏の主張には、それとして納得させられます。

平和主義・軍国主義 著者は元来日本は平和主義であったが、軍国主義的であったのは明治から戦前にかけてだけであったと考えているようです。確かに日本の天皇は武力をほとんど持っておらず、いわれるようにカリスマ性、和歌と書で家元になるという文化の力、そして位階勲等の授与によって国家支配をしていたにすぎません。明治以降、アメリカ、イギリス、ロシアの帝国主義に、こちらも帝国主義で対抗しただけのことであると言っています。かつて読んだ、ヘレン・ミアーズ著・伊藤延司訳『アメリカの鏡・日本』アイネックス、1995年でも同じようなことを言っていたことを思い出します。

哈日族 これは中国語で「ハーイーズー」と読むようですが、この数年台北で流行したのが若者の「哈日族」だそうで、これは衛星テレビその他で見た日本のファッションを何でも直ちに真似をする若者のことです。シンガポールやタイで日本人の評価が高まっていると言います。そういえば、どこの国に行ってもポケモンをはじめとする日本のアニメが大流行であることもよく知られています。これまでは欧米だけが新文化の発信を独占してきたけれども、今は日本もその一角に登場している。「しかるにその自覚が遅れているのは、たぶんメガネが古いのである」(88ページ)というわけです。“何だ、マンガか”、“たんに若者の流行の話か”、“どうせ日本製には限界がある”と考えている人は、今年中にそのメガネを換えた方がよい。欧米製の二十世紀型メガネでは二十一世紀は見えない(89ページ)。このようにいわれています。そして、「二十一世紀は日本型大衆社会の国際的普及からはじまる」(90ページ)と言わ

れています。

二十一世紀は東洋思想が主流に 著者はまた次のようにも言われています。

今日本で論じられていることから例をいくつか拾うと、たとえば行政面では「説明責任」「検査の強化」「格付け機関の設置」「司法の強化」などが説かれるが、それらは程度問題だということがやがて明らかになる。ノ経済では「経済成長」「会社の発展と存続」「経営の公開」「技術の進歩」などが無条件に善とされることへの庶民の疑問が力を得るにちがいない。ノ福祉では「介護」「終末医療」、ノそれから教育では「少年の扱い」「学力低下」、ノ宗教では「神の国」など、多くの問題で欧米的な建前と日本的な常識の衝突がはじまっている。この流れは二十一世紀には欧米から日本への思想的な歩み寄りになると思われる。東洋のほうが歴史は古く、思想が深いからである。

このよう言われています。確かに、欧米でもアジアの文化に畏敬の念を持っている人たちもいます。またかつてのアメリカの若者、ヒッピーなども進化論的歴史観に疑問を持ってエスタブリッシュメントに反発したのでしょう。

全ての意見に賛成というわけでもありませんが、もう少し元気を出すべきだという点は賛成です。ただ、行きすぎると国粹主義的になる恐れを孕んでいます。そして世界の孤児になってもいけません。戦前の日本がそうであったように。また、今の日本では、その恐れなしとしません。石原慎太郎東京都知事の発言を聞いていれば、賛成できる部分も結構あるのですが、危うさを感じてしまいます。「第三国発言」など強弁としか思えません。同様に、今度の小泉首相も期待できるかもしれませんが、むしろ危うさを感じます。実は、野党民主党の発言にも危うさを感じます。挙国一致内閣などのかけ声には、そういった危険を感じざるを得ません。自由主義と国粹主義と市場主義の併存という、危ういバランスの上に小泉内閣はあると思います。皆さんはどのように感じられているのでしょうか。

メールを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんの意見を歓迎します。また、メールで意見交換しましょう (matumura@ba.ritsumi.ac.jp)。メールをよこして下さい。個研 Tel(077) 561-4645FAX 兼用